

かながわの 民俗芸能

第65号



江の島囃子

神奈川県民俗芸能保存協会

目次

二〇〇一年「希望の年」記念事業
 「みんぞく芸能祭inかながわ」
 みんぞく芸能祭inかながわ実行委員会事務局……………3
 平成12年度新・神奈川県指定無形民俗文化財について 城所恵子……………4
 かながわ民俗芸能のつどい
 平成12年度報告と平成13年度予定 事務局……………7
 特別寄稿
 相模人形芝居かしらの特徴と価値 大谷津早苗……………8
 会員だより
 新しい世紀に相応しい民俗芸能 中坪功雄……………10
 心のふるさとを訪ねて 内田長志……………11
 民俗行事・生麦「蛇も蚊も」との出会い 永田泰祐……………12
 根府川の福踊り 長野ふさ子……………13
 相模の大風まつり 祖父川精治……………14
 川崎沖縄芸能研究会の沿革 川崎沖縄芸能研究会……………15
 「海老名音頭」との出会い 岡部眞智子……………15
 南足柄の民俗芸能 菊地晃三……………16
 一般寄稿
 西相模山北の洒水の滝祭り 古瀬考一……………17
 川村岸囃子保存会囃子連の活動 沼田道雄……………18
 新会員紹介
 権太坂横笛会 菊池四郎……………18
 横浜ごせ唄保存会 室野定子……………18
 ニュース・伝言板
 協会事業報告……………19
 会員活動紹介……………20

「みんぞく芸能祭inかながわ」

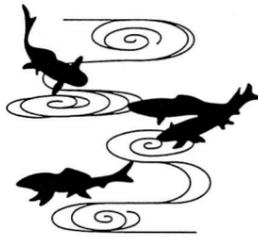
みんぞく芸能祭inかながわ実行委員会事務局

神奈川県では新しい世紀を「夢」と「希望」に満ちた世紀になるようにとの願いを込め、二十一世紀を迎えた今年を「希望の年」と位置づけ、県内全域で様々な記念事業を実施しています。「みんぞく芸能祭inかながわ」は、この「希望の年」記念事業の一環として、神奈川の歴史と風土に育まれ、地域で大切に受け継がれてきた民俗芸能を広く県民の皆さんに紹介するとともに、担い手の方々の励みとしていただく」と計画されたものです。

この一年間、県民の皆さんに県内の様々なところで神奈川の豊かで多彩な民俗芸能に触れていただくこと、県や県民俗芸能保存協会をはじめ、県内の十六の市や町などが連携協力して、現在、県内各地で工夫を凝らして様々な事業を開催しています。みんぞく芸能祭inかながわは、今年一月二十一日の座間市の「新春祭囃子たたき初め大会」で幕を開け、五月までに既に八市町で八事業を実施し、いずれも好評をいただきました。各地の祭りも盛んとなる夏から秋にかけて、いよいよこの事業も佳境を迎えます。十一月二十五日には、横浜ドームシアターにおいて、県内の多彩な民俗芸能を一堂に集めた「みんぞく芸能祭

2001」が開催される予定です。これからの時代を担う子供たちを中心とした団体や中国の伝統芸能の団体なども出演し、神奈川県ならではの多彩で国際色豊かな民俗芸能をご覧いただける催しとなる予定です。人類史上空前の発展を遂げた二十世紀、私たちは物質的な豊かさを得た反面、多くのものを失いました。グローバル化・ポータル化が進みます。二十一世紀には、私たちが育んだ文化そして地域を見つめ直すことが求められており、民俗芸能の重要性が再認識されています。

「みんぞく芸能祭2001」をはじめ、お近くの会場へ是非一度足をお運びください。また、みんぞく芸能祭inかながわ実行委員会では、県内の民俗芸能を紹介するガイドブックを作成いたしましたので県内の民俗芸能の探索に是非御活用ください。



民俗芸能大会名等	開催時期・会場	問合せ先
新春たたき初め大会 (祭囃子保存連絡協議会)	平成13年1月21日(日) 13:00~17:00 ハーモニーホール座間	座間市教育委員会生涯学習課 TEL.046(255)1111 内線3553
第25回秦野市民俗芸能大会	平成13年1月28日(日) 13:00~16:00 秦野市民文化会館小ホール	秦野市教育委員会生涯学習課 TEL.0463(87)9581
第22回新春はやし叩き初め大会	平成13年1月28日(日) 10:00~16:00 海老名市立総合福祉会館	海老名市教育委員会生涯学習課 TEL.046(231)2111 内線683、681
第28回相模原人形芝居大会	平成13年1月28日(日) 12:00~16:00 平塚市中央公民館大ホール	平塚市教育委員会社会教育課 TEL.0463(35)8124
郷土芸能保存横浜北3区連合会 第17回発表会	平成13年2月11日(日) 12:30~16:00 横浜市緑区公会堂	横浜市教育委員会文化財課 TEL.045(671)3279
小田原民俗芸能後継者育成発表会	平成13年2月25日(日) 13:00~16:40 小田原市中央公民館ホール	小田原市教育委員会文化財保護課 TEL.0465(33)1717
第23回川崎市民俗芸能発表会	平成13年3月4日(日) 10:00~16:00 川崎市宮前市民館	川崎市教育委員会文化財課 TEL.044(200)3306
舞台セット完成記念公演 (相模原人形芝居足柄座)	平成13年5月26日(日) 13:30~15:30 南足柄市文化会館小ホール	南足柄市教育委員会生涯学習課 TEL.0465(74)2111 内線361
第25回ささら踊り大会	平成13年7月24日(火) 13:30~16:00 藤沢市秋葉台文化体育館	藤沢市教育委員会生涯学習課 TEL.046(225)2509
第32回郷土芸能大会 (祭はやし大会)	平成13年9月15日(土) 10:00~15:00 鶴岡八幡宮境内	鎌倉市教育委員会文化財課 TEL.0467(23)3000 内線159
平成13年度相模原人形芝居特別公演	平成13年9月30日(日) 13:00~15:00 厚木市文化会館小ホール	厚木市教育委員会文化財保護課 TEL.046(225)2509
海老名市民文化祭 大谷歌舞伎特別公演	平成13年10月21日(日) 14:00~16:10 海老名市立文化会館	海老名市教育委員会生涯学習課 TEL.046(231)2111 内線186
第26回芸能発表会	平成13年10月28日(日) 13:00~16:00 仙石原文化センター	箱根町教育委員会生涯学習課 TEL.0460(5)7600
第27回二宮町民俗芸能のつどい	平成13年10月28日(日) 12:00~15:30 生涯学習センターホール	二宮町教育委員会生涯学習課 TEL.0463(72)6912
第39回厚木市民文化祭 郷土芸能発表会	平成13年11月3日(日) 12:30~16:00 厚木市文化会館	厚木市教育委員会文化財保護課 TEL.046(225)2509
第32回郷土芸能大会 (芸能大会)	平成13年11月11日(日) 12:00~16:30 レ・ウェル鎌倉	鎌倉市教育委員会文化財課 TEL.0467(23)3000 内線159
第25回ひらつか民俗芸能まつり	平成13年11月18日(日) 13:00~15:30 平塚市中央公民館	平塚市教育委員会社会教育課 TEL.0463(35)8121
第22回横須賀民俗芸能大会	平成13年11月18日(日) 13:00~15:30 横須賀市文化会館	横須賀市教育委員会生涯学習課 TEL.0468(22)8181
第29回茅ヶ崎市郷土芸能大会	平成13年11月25日(日) 13:00~16:00 茅ヶ崎市民文化会館小ホール	茅ヶ崎市教育委員会生涯学習課 TEL.0467(82)1111 内線3313
みんぞく芸能祭2001	平成13年11月25日(日) 13:00~17:00 かながわドームシアター	神奈川県県民部文化課 TEL.045(210)3808
みんぞく芸能祭 inかながわ 西さがみ大会	南足柄市大会	平成13年12月2日(日) 12:00~17:00 南足柄市文化会館大ホール
	小田原市大会	平成13年12月9日(日) 12:00~17:00 小田原市中央公民館ホール
		民俗芸能祭inかながわ西さがみ大会実行委員会事務局 神奈川県民俗芸能保存協会(県生涯学習文化財課内) TEL.045(210)8351 小田原市教育委員会文化財保護課 TEL.0465(33)1717

平成12年度

新・神奈川県指定無形民俗文化財について

城所恵子

地域の願いをこめて舞う一人立三頭獅子舞

平成13年2月に、県内5カ所の一人立三頭獅子舞が新たに県の無形民俗文化財の指定を受けました。5カ所とは、横浜市青葉区元石川の牛込の獅子舞、青葉区鉄町の鉄の獅子舞、川崎市幸区小向町の小向の獅子舞、同宮前区初山の初山の獅子舞、同多摩区菅北浦の菅の獅子舞です。県内には現在10ヶ所に一人立三頭獅子舞が伝承されてお

り、そのうちの津久井町鳥屋、相模原市下九沢、大島、愛川町三増の獅子舞は、昭和53年に既に県の指定を受けています。この4カ所の獅子舞のうち、鳥屋の伝承は他より古く、古態をとどめ、また下九沢、大島には、多摩川上流域に広く伝播している獅子舞保存団体が保管している、角兵衛流獅子舞の祖、山崎角大夫の記した『日本獅子舞来由』の写しを所有しており、伝承経路が明確であり、三増の獅子舞も下九沢、大島の舞振りとも共通していることから、同系統とみることが出来ます。平成指定の5カ所のは、伝播経路や年代が定かではないのですが、それゆえ、地域毎の持ち味が生かされています。

一人立三頭獅子舞は、箱根仙石原の湯立

て獅子舞や、祭囃子にのって舞う大神楽系の二人立獅子舞とは系統が異なり、腹に太鼓を付けて打ちながら舞うこと、所管の歌詞が共通している点で、日本各地に広く分布している風流系(着飾る又は仮装をしたお練り)の大鼓踊りに含められています。

三河設楽地方で、依代として大きな団扇を背負い、腹に太鼓を付けた盆の芸能「ほうか」と、座舞を中間に挟む3部構成の舞振りが類似しています。

獅子の起源は、西域に起きた伎楽の中で舞われ、仏教文化と共に日本に移入された。天平勝宝4年(七五二)東大寺の大仏開眼法要の際に、楽に合わせて練り歩いた獅子頭が最も古いもの一つとして正倉院に収蔵されています。

獅子や龍は想像上の動物で、ライオン、虎など日本に実在しない動物が当てはめられたり、より身近な動物の鹿や猪に置き換えている地域もあります。共にそれらの動物の持つ威力や跳躍力故に霊獣と崇められ、悪霊祓いの願いを託してきました。今でも祭礼行列の先導に立ち、道を清め祓いながら、観衆の頭や患部を噛んで病を取り除くなど、庶民の生活の中で身近な信仰の対象として親しみを保っています。

5ヶ所の獅子舞の特徴はつぎのようです。牛込の獅子舞(牛込獅子舞保存会) 10月第2土曜日に青葉区美しが丘の神明社、第2日曜日に鷲神社に奉納。元禄時代(二六八八〜一七〇四)に悪疫流行の折に

伝授。3頭の獅子役と幣負い役は少年が当たる。舞に先立ち、神社までの道行には大万灯1、小万灯2、法螺貝2が随行する。三角、方形、縦・横一列と隊形を変えながら、しゃがむ、立つ、片手ずつ左右に伸ばすなど所作が力強い。足の甲をもう一方の踵につける反問(地面を踏みしめ悪霊を鎮める)や、太鼓の棒打ちの多いのが特徴になっている。平成3年11月、横浜市無形民俗文化財に指定。

鉄の獅子舞(鉄古典獅子舞保存会) 10月第1日曜日に鉄神社に奉納。慶長(一五九六〜一六一五)の頃悪疫流行の折に調布方面から移入。天狗、ひよっこは成年が、ささら摺りは2人の少女、このほか金棒引き2、法螺貝2、花籠振り1対が道行に連なる。太刀掛け、幣掛け、花笠まわりなど舞振りて舞を区分し、東京の秋川や奥多摩の流れを示す。花や弓と獅子がじゃれたり、格闘を表わす舞振りなど変化に富んでいる。平成9年12月横浜市無形民俗文化財認定。

小向の獅子舞(小向獅子舞保存会) 8月第2日曜日に八幡神社に奉納。宵宮では、妙光寺を含め町内を練り込み、小向会館で一舞。享保年間(一七一六〜一七三六)地元出



初山の獅子舞(川崎)

一人立獅子舞は、東日本以北に多く分布し、三五・八・十二と複数頭で組んで舞います。そのうち三頭獅子舞は関東地方に多く、その起源は定かではありませんが、福島県いわき市の寛永年間、千葉県佐倉市の寛文元年(一六六一)、神奈川県津久井町の寛文年間(一六七二)など、近世初期

の銘のある獅子頭が各地に残っていることから、江戸期に江戸や周辺の農村部に伝播したと考えられます。県内では北西部に限られていますが、多摩川中流域一帯にかけて夏の終わりから日を追って多くの集落で次々と舞われていました。舞の目的は、先祖の供養、村落共同体の安全祈願、五穀豊穡のほか、雨乞いにも舞われ、そのために雨を招く龍頭を用いる所もあります。早魃、悪疫流行の時にだけ舞っていた地域では伝承が途切れて近隣の集落から習い直すこともあったようです。獅子舞は修験僧など職能宗教者によって伝授されたために、薬師堂や不動堂を舞庭にしています。が、明治以降の神仏分離令により神社祭礼に組込まれるようになっていきます。

三頭獅子舞は、雄獅子2、雌獅子1、それぞれの角の形状から剣獅子、巻獅子、宝珠獅子とも言われています。この他に、蠅追(幣負い)、天狗、道化などの獅子あやし役、2または4人の花笠を被ったささら摺り、数人の棒遣い、笛数人、歌上げが付きます。獅子や獅子あやしには地域の少年や若者が当たり、以前は長

川崎市重要習俗技芸指定。(3箇所一括)

初山の獅子舞(初山獅子舞保存会) 10月第1日曜日に菅生神社に奉納。江戸初期の獅子頭が現存するので、伝承も古いと思われる。栗毛の雄獅子、白毛の雌獅子、サイコロやひょうたんを携えた天狗面の幣負いは小・中学生が務める。ささらはない。公民館から道行をし、舞庭となる土俵に幣束を立て、幣負いが清めてから舞が始まる。半円、円形、一列と舞型を変えながら地を這うように低い姿勢での舞振りに特徴がある。中休みのあとの座舞では観客からおひねりが投げ込まれ、幣負いが獅子を相手に博打を始める場面があり、雌獅子隠しでは剣獅子が雌獅子を隠す悪役を演じる。

菅の獅子舞(菅獅子舞保存会) 9月12日前後の休日に薬師堂に奉納。宝泉寺に残る獅子舞復活願いの文書「虫風祭得心連判帳」には明和8年(一七七二)とあり、それ以前から舞われていたとみられる。獅子、天狗役は20歳以下の男子が脚絆に草鞋履きの旅支度で舞う。40人ほどの小学生が手製の笛で参加。ささらはない。獅子宿から法螺貝の先導する道行の途中、天狗と親獅子が先に「道中改め」の土俵検分を3回行なう。舞の所作は、相対する2人が位置交代をする「跳びちがい」など跳躍が多い。座舞では、旅籠で天狗が獅子を相手に博打を展開する。歌詞は長歌型の誉め歌、掛り歌のほか、お夏清十郎など義太夫に基く歌も取入れている。当日子ども相撲も奉納される。

男だけが舞う資格を待ち、門外不出ともいわれ、成年戒行の性格をもっていました。歌上げは年配者が担当します。

獅子役は、鶏毛や赤毛の付いた獅子頭の前に水引幕を下げて被り、頭の後ろに胴幕(ユタン)を着けます。幕の色と柄は地域のアイデンティティを示すものです。毛や腰には神格化の印として幣束を付けたリ、挟んだりしています。手甲に足袋または草鞋という身支度で舞います。この舞は単に太鼓を打って舞うだけでなく、雌獅子をめぐって二頭の雄獅子が争う「雌獅子隠し」(所によっては父・母・子の三頭で母を探す)という物語性のある部分を後半に取入れたところに大きな特徴があります。



牛込の獅子舞(横浜)

相撲は立川市など多摩川中流域共通の地域性を示している。

江戸のひびきを伝える江の島囃子

江の島囃子も平成13年2月に、県の無形民俗文化財に指定されました。江の島囃子は、藤沢市江の島の江の島神社の末社、八坂神社で7月13・14日に近い土・日に行なわれる天王祭で囃される祭囃子です。江の島囃子とは、通り囃子、松囃子、神囃子、龍神囃子の4保存会と、唐人囃子愛好会とその囃子の総称で、5団体で江の島囃子連合会を結成しています。祭礼の宵宮では、神輿の安置してある仮宮まで各保存会の持つ本囃子、天王囃子を囃しながら登り、帰路は流行歌を取入れた帰り囃子で賑やかに戻り、翌日の本宮祭では通常は子ども達による通り囃子が、鎌倉市腰越の小動神社への神輿の渡御に供奉します。

囃子の由来は定かではありませんが、楽器編成と曲目に特徴があります。各囃子の特徴は次の通りです。
通り囃子: 笛、手太鼓(柄のついた1枚革の団扇太鼓)、三味線、大太鼓
松囃子: 笛、縮太鼓、三味線、大太鼓
神囃子: 笛、縮太鼓、大太鼓
龍神囃子: チャルメラ、笛、縮太鼓、三味線、鼓、鉦、銅鑼
唐人囃子: チャルメラ、笛、手太鼓、大太鼓



江の島囃子：龍神囃子のチャルメラ

唐人囃子の曲には、トシシ、チャタラ、テンレースなどの曲名がついています。また坂道が長いので、締太鼓、大太鼓を用いる囃子は、今では稀少となっている底抜け屋台に太鼓類を載せて曳行すること、行列の一部としてではなく、囃子の奉納が宵宮の主体であることも特徴となっています。

江戸時代、天下祭と言われた徳川家の産生神である山王日枝神社と、江戸の総鎮守、神田明神の隔年毎の祭礼は、江戸の庶民にとって大きな楽しみでした。豪華な趣向を凝らした40基以上の山車行列は江戸ばかりか周辺の大きな町々の祭礼にも多大の影響をもたらしました。余りの華美に、しばしば幕府から禁止令が出されると、許容範囲内で工夫に磨きをかけて新たな展開を重ねてきました。町印となる万灯型山車・作り物を載せた屋台・練り子という3点セットから苦心の末完成した囃子と作り物の一体

化した2、3層の江戸型に集約された山車は時代の大きな変遷の中で周辺の町々に譲られていきました。県内でも往時をしのばせる山車類が、現在も祭礼を賑わせています。例えば、伊勢原の比々多神社の万灯型山車、中井町五所宮八幡神社の笠鉾、藤沢市鶴沼皇大神宮の9基の3層人形山車、横浜市金沢から横須賀市走水にかけて多くみられる彫刻の見事な囃子屋台などが相当し、いずれも台車から真直ぐに立つ神柱を持ち、神霊の依代としての面影をとどめています。

江戸の祭囃子は、笛、締太鼓2、大太鼓、鉦の五人囃子に今では固定されていますが、延宝5年(一六七七)刊の『江戸雀』には「まつりの美々しさ、或いは引き山・花屋台、錦金欄を張り廻して、小歌三味線笛つづみ太鼓かねうちならし…」とあるように、初期の祭囃子の楽器編成はさまざまだったようです。県内の祭囃子のほとんどは江戸の祭囃子を伝承していますが、江戸期に早くも葛西系の囃子を取入れて足柄郡一帯に広く分布している小田原囃子には玉入れが伝承されておらず、明治以降に新たに編み直された神田・目黒系を伝えている横浜市内の祭囃子では、玉入れなど太鼓類の技を競う部分を挟むように、同じ江戸の祭囃子を継承しても、伝習時期により異なったスタイルを伝えています。

江の島の弁財天は武士の守り本尊であるとともに、元禄時代には音楽の守り本尊と

して崇められ、長唄・清元・常磐津の名取り披露目や検校らが来島しており、安政3年には深川、新吉原、魚河岸、柳橋の芸妓連が弁財天の神輿を奉納したことなど、江戸下町との繋がりが深く、身近にさまざまな音楽と接する機会があったことから、今では珍しくなっている三味線や鼓などが祭囃子に取入れられていても不思議ではないでしょう。

チャルメラ、銅鑼も珍しい楽器ですが、徳川幕府の善隣友好の外交政策の中で、朝鮮通信使がたびたび来日し、その大行列が日本列島を縦断したことなどから、異国人のイメージが生まれ、江戸天下祭をはじめ、各地祭礼行事に朝鮮風俗の行列や、唐人囃子が参加し、唐人のイメージとしてチャルメラが吹かれ、歌舞伎の陰囃子でも唐人登場には銅鑼がイメージ作りに使われています。江の島囃子の龍神・唐人囃子もそのよな時期に囃子として整えられたとみてよいでしょう。江戸山王祭の練物行列7番の弁財天、21番の龍神山車には両囃子が何年も続けて招かれて囃したことが「山王祭山車番付」に記録されています。

この両囃子は、鎌倉円覚寺の洪鐘祭の行列にも参加していることが円覚寺弁天堂に掲げられている扁額(天保11庚子一八四〇祭□・安政5年掛額)からも伺え、また吉原俄にも出演するなど、一地域の囃子としてばかりでなく、流行の囃子の一つとして注目を集めていたことも伺えます。江の島



江の島囃子：三味線

かながわ民俗芸能のつどい

平成12年度報告と平成13年度予定

事務局

「かながわ民俗芸能のつどい」は、神奈川県内の民俗芸能関係の市町村の大会やイベントなどと共催して、神奈川県内の民俗芸能の公開を促進し、普及啓発を図る目的で開催しています。

○平成12年度報告

「第2回かながわ民俗芸能のつどい」では、一人立三頭獅子舞の特集として、相模原市、川崎市で開催しました。神奈川県内には、一人立三頭獅子舞の保存団体が10団体あり、詳細は本誌前項で述べられているとおりです。これらの団体は県北部に分布しており、それぞれ3団体が所在する相模原市、川崎市の会場を拠点に多くの一人立三頭獅子舞を公開しようというものです。この両公演を観覧すれば神奈川県内の半数以上の一人立三頭獅子舞を見ることができ

ます。はじめが第21回相模原市民俗芸能大会。平成12年10月22日(日)、あじさい会館ホール。地元からの「田名の獅子舞」、「大島の獅子舞」に、愛川町の三増獅子舞保存会とその指導を受けている県立愛川高等学校「伝統文化」受講生の「三増の獅子舞」、隣接の町田市から「矢部の獅子舞」

が参加し、公開されました。

続いては、川崎市立日本民家園の恒例の催し「民家園まつり」(民俗芸能公演)。平成12年11月3日(祝・金)、園内の園指定重要有形民俗文化財「船越の舞台」を活用しての催しです。こちらには川崎市内の3団体「小向の獅子舞」、「初山の獅子舞」、「菅の獅子舞」が参加しました。

いずれの会場も盛況で、相模原会場では満員、川崎の会場も無料入園日とあって多くの来園者が最後まで観覧していきました。参加していただいた各保存団体の方々も互いに獅子舞を観覧するなど交流を深めた様子でした。とりわけ川崎市内の3団体



第21回相模原市民俗芸能大会

○平成13年度予定

「第3回かながわ民俗芸能のつどい」は、川崎市立日本民家園の「民家園まつり」と、「みんぞく芸能祭inかながわ」の一環として行われる「西さがみ大会」を予定しています。

昨年に引き続き「民家園まつり」民俗芸能公演と共催し、今回は「鮎屋踊り特集」を企画しています。鮎屋踊りは、粉屋踊り、万作踊りなどとも呼ばれ、関東一円に分布している民俗芸能で、鮎屋が余興に演じたものが土地々に伝わったものです。踊りは手踊りと段物に分類され、特に段物は歌舞伎の影響を受けているようで、「船



川崎市立日本民家園・船越の舞台

の囃子は古くは弁財天の祭礼に奉納し、明治6年に弁才天の末社、天王社から八坂神社に改称した後、八坂神社の天王祭に囃されるようになったと考えられます。

囃子の伝承は、参道の両側に構える旅館や土産物店の並ぶ西町と漁師町の東町に分かれ、それぞれ若くは祭制度の中で段階的に難易度を上げて4囃子を習得していましたが、若者の減少で囃子の維持が困難になり、昭和45年頃、東西合併して祭典委員会に組み込まれて囃子を伝承するようになっていました。各囃子の曲、本囃子はしっかりとしているにもかかわらず、少子化の時代であっても保存会の会員数は増加傾向にあり、しかも現在休止状態になっている囃子を復活しようという気運もみられます。巳年(亥年も)に当たる今夏は全囃子が腰越まで神輿を供奉し、例年よりさらに賑わいをみせました。江の島囃子は、関東一円の祭囃子が確立される以前の囃子の姿を知る上で貴重な存在といえましょう。

越の舞台」での上演にはびったりと思われる。出演予定は、地元川崎市内から「土橋万作踊り」、「三浦市の「菊名の鮎屋踊り」、横須賀市の「長井の鮎屋踊り」の3団体です。日時は、平成13年11月3日(祝・土)

また、平成13年は「みんぞく芸能祭inかながわ」の一環として足柄平野を中心とする地域を対象に、小田原民俗芸能保存会、南足柄市の4保存団体とともに実行委員会を結成して「西さがみ大会」を2会場で開催する予定です。日時・会場は、平成13年12月2日(日)南足柄市文化会館大ホール、12月9日(日)小田原市中央公民館ホールです。広い舞台を必要とする民俗芸能は南足柄市会場、こじんまりとした会場が合う民俗芸能は小田原市会場という形を考えています。



12年度民家園まつり・菅の獅子舞

特別寄稿

相模人形芝居かしらの特徴と価値

昭和女子大学・講師 大谷津早苗

人形浄瑠璃のかしらは、現在、全国二〇〇箇所に存在している。かしらを操り、演じているところもあるし、かしらのみ残るところもある。

神奈川県内では相模人形芝居五座が芸を継承、現在もさかんに活動が行なわれている。また、現在は遺われていないが、牧野人形（神奈川県立歴史博物館蔵）、田島人形（小田原市立郷土博物館蔵）、座間の人形（鈴木英夫氏所蔵）などのかしら資料もある。昭和五十五年、長谷座、林座、下中座が国の重要無形民俗文化財に指定され、昭和五十七年には前鳥座、足柄座が県の無形民俗文化財に指定されている。相模人形



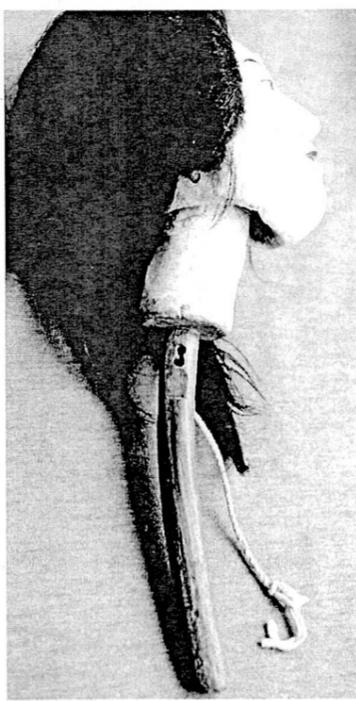
写真①

芝居は早くからその価値を認められてきたのである。相模人形芝居の価値の一つは、

技術を最も高度に発達させた現在の文楽のかしらのようなつぎ形式で、写実的で細やか

く、幾分湾曲している（写真③）。それは

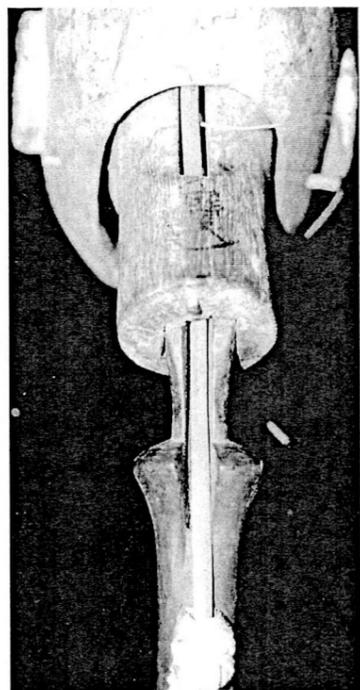
れ続けるのである。うなづき形式にも変化



写真③

二、三の例に留まらないので、偶然とは考えにくい。胴串が湾曲しているということ

は、前傾に構えざるをえない胴串形と考えられる。佐渡の

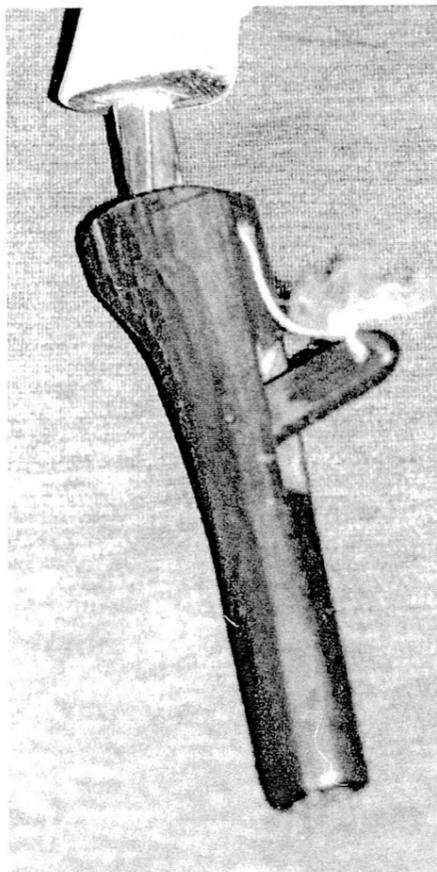


写真④

「引栓式」「小猿式」とも違う、「偃齒式（偃齒棒式）」といううなづき形式の形跡を残すかしらが存在していることである。かしらというものは、いつまでも制作当時のままの原形を保っているわけではない。操りの技が継承される過程で、かしらは修理され、塗替え、作り変えられて使わ

れ続けているのである。うなづき形式にも変化の後がみられる場合がある。「偃齒式（偃齒棒式）」は、鯨の髭である偃齒製の棒を上下させてうなづきを操作する形式である。「偃齒式（偃齒棒式）」より前の、古いうなづき形式とみられている。「偃齒式（偃齒棒式）」のかしらは全国的にみてそう多くはない。相模人形芝居のかしらの中では、下中座・足柄座の三番叟等が、のど木後部には深い溝が刻みこまれており、かつては「偃齒式（偃齒棒式）」であったことを示している。相模人形芝居において、「偃齒式（偃齒棒式）」という古いうなづき形式のことは、今まであ

に表現できるのが、この形式である。二つめの形式が「小猿式」である（写真②）。



写真②

この形式は「引栓式」に較べると動きが粗いという特徴がある。（もう一つ、「プ拉里式（引玉式）」といううなづき形式があるが「小猿式」と同じ表現効果をもつので「小猿式」と同系と見なす。）

全国的にみると、「引栓式」の数量はそれほど多くはない。その多くは、文楽の地である大阪を中心にごく狭い範囲に分布している。それに較べて、「小猿式」は地方で一般に用いられているうなづき形式である。数量も多く、「引栓式」の分布範囲の外周部分、かなり広い範囲に分布しているのが現状である。このような分布状況を民俗学の周囲論で解釈すると、外側の広い範囲に存在している「小猿式」は古く、内側の狭い範囲に存在する「引栓式」は新しい形式であると考えられる。相模人形芝居のかしらには、「引栓式」も僅かながら存在して

いるが、大部分は「小猿式」である。相模人形芝居のかしらは現在の文楽より前の形

式を受け継いでいるといえよう。

また、この「小猿式」のかしらは、本来、人形遣いが持ち手を伸ばし胴串を前傾させて遣うかしらである。それは以前から相模人形芝居の特徴といわれてきた、「鉄砲差し」という遣い方である。現文楽の「引栓式」かしらは、遣い手が肘を直角に曲げ胴串を垂直に持つ遣い方である。胴串を前傾させて遣う「鉄砲差し」の遣い方は現文楽より一段階前の人形の遣い方と考えられる。

「鉄砲差し」は相模人形の遣い方の特徴であるとともに、地方に広く分布する「小猿式」かしら所在地における遣い方の特徴でもある。「鉄砲差し」かしらは、人形の顔が前傾に構えた場合に顔が正面を向くように造られている。この構えで想起されるのが佐渡の一人遣い、文弥人形である。文弥人形は、胴串が真っ直ぐというのではな

まり言われてこなかったようである。しかし、かしらにおける機巧の変遷は、相模人形芝居の歴史の変遷に関わることであり、注目すべき事のように思う。

これもまた相模人形芝居の特徴としてあげられることだが、長谷座には、人形の式三番に使用する白尉黒尉の仮面が残っている（写真⑤）。かつてはおそらく祭りの場



写真⑤

で、信仰を目的として、また奉納芸として式三番が行なわれていたことが窺われる。神事芸能としての人形式三番は、群馬の下長磯、長野の親沢、伊豆の仁科、宇久須等で伝承されている。また、式三番のかしら



白尉黒尉仮面のみを残すところは宮崎、大分、山口、四国、愛知の小田木、御殿場など更に広範囲に点々と分布している。神事芸能としての式三番は、阿波・淡路の操り職能芸団と関わりを持っていると考えられるが、本来能の形式である式三番が人形操りにいつ頃取り入れられたのか、まだ明らかではない。相模人形芝居は、白尉黒尉の仮面が存在することで阿波・淡路の操り職能芸団との関係も考えられる。また、相模人形芝居は、先に記した式三番の、一連の資料としての価値をも持つことになり、興味深い。

加えて、下中座には幕末から明治にかけて江戸で工夫された一人遣い、車人形に用いた足が残る。足柄座には、江戸人形芝居の最後の遣い手で車人形も巧みであったといわれる吉田冠十郎作のかしらが存在している。相模人形芝居は、近代の資料をももっているといえよう。

以上、何点か、現在考えている相模人形芝居の資料価値を挙げた。相模人形芝居は、今まで考えられていた以上に、時間的にも、資料としても幅があるように思う。

新しい世紀に相応しい民俗芸能

個人会員 中坪 功雄

民俗芸能とは何か

私たちの下にはしばしば「色々な大会やイベント出演に依頼があるのだが、何をどうしたらよいか分からない」という相談や「神にまつわる芸能が、その生まれたふるさとを離れて行う事は破壊に繋がる」反面「外部に積極的に出演する事が、地域振興や観光に役に立つ」といったさまざまな意見が寄せられ、昨年の民俗芸能学会総会においても是非の議論がつきませんでした。民俗芸能研究書は山ほどあっても、公開の仕方や見書も調査書も見たことはありません。そのわけは「民俗芸能の概念」といった初歩的な定義が未だに定まっていなかったからではないでしょうか。そこで民俗芸能を三つの区分けにしてみました。一つ目は「固有信仰を背景とする祭りの中で神様、仏様向けではあるが芸能的要素が息付しているもの。二つ目は芸能が祭りから独立して「見せる・演じる」芸能として展開する様になったもの。三つ目は初めから舞台と観客がいて成り立つ民俗芸能や各地を巡業した挙げ句、その土地に定着した芸能があります。そして民謡とか太鼓の他に寄席の色物や大道芸も大衆演芸もジャンルに入れたらどうかと

いう意見も出てきました。

社会と向き合う民俗芸能

今では民俗芸能の場がふるさとを離れ、祭りの場よりもイベント催事が主流となり、地域振興の催事や観光開発と結びつくようになりました。目玉として「何が面白そうか」といった一見派手で面白そうなのだけに興味と関心が集中しがちです。更にこの傾向は、国際文化交流という美名の下に外国にまで出かけ、エキゾチックジャパンを演出する材料として利用されるようになりました。この流れが国の内外をとわず頻繁に行われていることは、好むと好まざるに拘らずその度合いを強めています。またこの事実が民俗芸能のために果たしてよいものかどうか論ぜらるべき点であって「功罪ともある」との声にも耳を傾ける必要があります。そして功罪ともにあるとすれば、罪とは如何なる面か、またその罪の面を消して公開するには如何にすべきかが問題点となるでしょう。問題は数多くの民俗芸能の舞台化を見ていると、中にはその根幹を知らず、その内容の検討も不十分なまま余りにも便宜的に安易に舞台にのせてしまう事が多いことでは

う。本質を無視された結果は何と軽薄な退屈なつまらないものかという事につながります。一方、功の面を考えれば、わが国の秀れた伝承文化遺産である民俗芸能の美しさとその技を多くの人達に見せる事は重要なことです。欧米の場合を例にとると、地域社会の中の民俗芸能は芸術であることを基本に「アートプロジェクト」「町おこし」にも参加。地域の芸術団体として子どもたちの教育にも活用されています。これからは保存か振興も大切だが社会的なテーマと係わってゆるゆるコミュニティーの役割をいかにして持つかという事も必要になります。

アート・マネジメントの活用は効果的

そこで功罪の罪の部を出来る限り少なくするための手だてが必要となります。それはどのようにすればよいのか。舞台に出演する場合やイベントや海外に出かける場合、色々な諸問題に直面します。それらの解決方法としては、民俗芸能にプロデューサーの導入とアート・マネジメントの手法を取り入れることです。アート・マネジメントは、何も舞踏と美術と演劇と音楽に関わる人たちの専有物ではないことを強調したいと思います。アート・マネジメントの手法とは制作能力、企画力を含めたいわゆる創造性・演出能力を発揮して発信することです。成功している音楽や演劇には提供する側と受取る側があります。現実には民

俗芸能の実施の過程におけるマニュアルや教科書などは存在しません。成功している裏にはそれを企画して教科書が書ける仕掛ける人達がいるからです。民俗芸能も全く同様で、地域に今在る民謡とか民俗芸能保存会や文化団体の特性を今に蘇らせるために、プロデューサーする能力を持った人たちに再創造して貰う事が大切です。

その人達のことをプロデューサーといいます。その人達は相手の懐事情を考えて制作予算を作る力を持つこと。企画から実施、運営に至るまで、文化事業に特有な専門的な知識とマーケティングは必須条件です。そして目に見えない部分の舞台、音響、照明、ロケマネ、運搬、司会者などスタッフの協力が無ければ成り立ちません。理論的には基本構想、基本計画、実施計画の三つがありますが、計画書の作成は、民俗芸能開催にともなう種々の準備プロセスのなかでも最も重要な意味をもつもののひとつです。初期の段階で基本的な考え方や進むべき方向を明確にしないまま放置し、その後現場当たりの対応を重ねることは、最も避けなければならないことです。なんと言っても基本は民俗芸能の知識を豊富に持つことが必要なことです。しかし現実には明確な概念や定義もなく、民俗芸能を知らないで企画や実施をしている事が何と多いことか。今後この場をお借り出来るならば「海外交流の意味」「公開や公演を成功させる為の手法条件」など述べて見たいと思います。

会員だより

心のふるさとを訪ねて

個人会員 内田 長志

仙台に単身赴任していた頃、休日を利用して、あちこちの名所・旧跡を見て歩いた。そんなときに「素晴らしい盆踊りがあるよ」という言葉を耳にはさみ、ふらっと見に行った秋田県・羽後町の西馬音内盆踊り。たかが盆踊りと思っていたが、しなやかな女踊りと軽快なお囃子のリズムにひきつけられ、時間を忘れて見物した。

冬の寒い日、春日神社の王祇祭で夜を徹して能が舞われると聞き、山形県・楯引町の黒川能を見に行った。民家を開放し、仮設の舞台を作り、独特の節回しで能が演じられていた。装束や面も立派で、兼業農家の人々がよくそこんなに素晴らしい芸能を習得し、長年継承して来たものだと感じていた。

また、後日、岩手県・北上市の鬼剣舞の素晴らしい躍動感に感動することもあった。この三つの民俗芸能は偶然にも国指定重要無形民俗文化財であったことから、重要無形民俗文化財に興味を持つようになった。そんなことから、二〇〇〇ほどの国指定重要無形民俗文化財を全部見たいと思うようになり、ビデオカメラをお供に各所の祭りや民俗芸能大会を計画的に見て廻るようになった。

『祭り街道』を歩み始めると、今まで知らなかった日本の民俗芸能や生活習慣に遭遇し、興味はますます広がった。

祭りには、民俗芸能あり、昔から伝承されて来た生活習慣あり、とその内容はさまざまであるが、その地域の人々が誇りとする心のよりどころであり、『心のふるさと』ではないかと考えるようになった。そこでビデオテープのタイトルを、『心のふるさとを訪ねて』とした。

定年退職後は祭りの見学範囲を東北地方から全国に広げた。北は北海道・阿寒湖のまほろ祭り、アイヌ古式舞踊、南は沖縄・竹富島の種子取祭における芸能など、今日までに見学した祭りや民俗芸能は三五〇強、そのうち国指定重要無形民俗文化財は八〇弱であり、まだまだ道半ばである。

国や地方自治体が指定する重要無形民俗文化財はその地域の生活習慣や芸能文化を表すものではないかと考えている。それらの文化は、歴史的に時の支配権力に影響され、盛大に継承されるものもあり、また消滅して行ったものもあった。そしてその地域が平和であればあるほど、また支配権力の理解があればあるほど、その伝統文化はスムーズに継承されてきたのではないかと

感じるようになった。

祭りをしていると楽しさが湧き出てくる。祭りには笑いが溢れている。笑いは喜びの表現であり、喜びは心の豊かさを高めさせる。また祭りは多くの老若男女の協力で行なわれるため、人と人との熱い交わりと地域社会の連携強化に役立ち、子供の情操教育にも貢献している。

平成12年7月下旬、東京・渋谷で、COEJ(国際民族芸能組織委員会)が主催する第2回ワールドフォーカロリアードが56か国から約2千人の参加のもと開催された。5日間足を運び、世界各国の民族芸能を見ることができ、言葉や習慣の違いを乗り越えた平和の祭典を楽しんだ。

秋祭りともなると、近隣の神社で国指定重要無形民俗文化財『江戸の里神楽』が奉納されている。しかしあまり開催のPRがなく、偶然に見ることができたが、わが地元でこんな素晴らしい民俗芸能が毎年紹介されていた事を40年間も知らなかったことを恥じた。

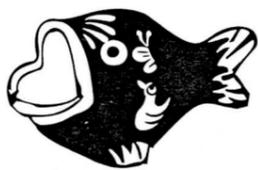
神奈川県民俗芸能保存協会の会員に入会させて戴き、いろいろな情報を教えて貰えることに大変感謝している。協会から戴いた民俗芸能の案内をもとに、平成13年の小正月、小田原の福踊りと大磯の左義長行事を見に行った。

小田原・根府川の福踊りの起源は江戸末期との説があるが、途絶えていた福踊りを平成に入って40年ぶりに復活したとのこと

である。子供達が、おかめ、ひよとこの面を被り、横綱みたいな縄を腰に巻き、日の丸の扇を持って踊り、子供の健やかな成長と家内安全・無病息災を祈るものである。一方、大磯海岸の左義長行事では、正月のお飾りや縁起物を集め、サイトを作り、夜に火をつける。そして、ヤンナゴッコという豊漁を祈念する綱引きが行われた。9つのサイトに同時に火がつけられ、寒さも吹き飛ばすような大きな炎の柱が海岸を照らす光景は誠に美しいものである。

最近、近隣の神社や小学校でもこのドント祭を復活し、伝統を後世に伝えようとする試みが行われるようになってきた。民俗文化財保護の先進国日本は、農耕文化を基盤に、素晴らしい伝統芸能を継承してきたが、平和と安定の賜物であることを感謝しなければならぬと感じている。

各所の伝統芸能保存会はその伝承に大変苦労していると聞いている。今後も国や自治体の熱い保護のもと伝統芸能が盛んになり、情緒豊かな日本人の心の支えになることを祈りたい。それが平和と安定の証になると考えている。



の子たちでやっていたという。その頃、福の神をやる子たちは、前もって、神社に子供たちだけでお籠もりをして祈ったという。小田原市教育委員会「根府川の道祖神と福おどり」によると、正月四日から毎晩籠って祈禱し、年長の人たちが福踊りを習ったとある。神社に籠るとは、古く遡ってみると、祈るためだけでなく、神を迎え神となることでもあった。神域や祭の際、注連縄が張られるように、腰に注連縄を付けることも、神がそこに降りた印であった。子供たちは福の神になったのである。

また、昔、家々を廻ったときにいただいたご祝儀は子供たちだけで分けたりして使ったという。こんな信仰的な行事でも、昔の子供たちには、子供たちだけの世界・社会があったのである。

この日、神社拜殿の前には、色とりどりの団子が飾られた木が立てられていた。それともう一つ、船も飾られていた。これも子供たちが作ったものだという。きれいな

会員だより

相模の大凧まつり

個人会員 祖父川 精治

相模の大凧まつりが5月4、5日にかけて晴天に恵まれて開催された。会場の相模川のグランドへ行くのに、小田急座間駅から軽いハイキングを兼ねて行くことにする。まず、駅から10分、板東三十三札所巡り

の第八番札所として知られた星の谷観音堂のある星谷寺。境内の嘉禄3年(一二二七年)の銘がある梵鐘は、関東以北では二番目に古いものといわれ日本三奇鐘の一つに数えられる国の重要文化財に指定された由

つに、字凧であるということがあげられます。右上に赤色で太陽を、左下に緑色で大地を表す2文字が書かれます。文字は、約二〇〇年の歴史をもつ大凧まつりを、より身近なものにしていこうと、毎年広く市内外の皆さんから募集して決めていきます。

4 糸目付け
大凧が揚がるかは糸目付けで決まるといわれるほど大切です。そこで、根気と時間をかけ47本の糸目を付けます。糸目はロープで太さが1センチあり、大凧が空で前傾に、しかも左右の下側の糸にたるみをもたせるように付けます。

大凧の概要
当日配布された相模の大凧まつりパンフ



会員だより

沖縄芸能と川崎沖縄芸能研究会の沿革

団体会員 川崎沖縄芸能研究会

琉球古典芸能の歴史は古く、三線音楽については17世紀の中ごろといわれている。その古典音楽が素地となって舞踊や組踊が創作されたのである。組踊は日本の能と歌舞伎の中間に位置する総合芸術である。踊奉行の玉城朝薫が二度も王の命により江戸へ行っており能や狂言、歌舞伎を見聞し、それらの要素を取り入れたであろうことは明らかである。中国からの冊封使を

迎えての御冠船踊として、冊封使宴席で演じられたのである。中国からの冊封使派遣は、一三七二〜一八六六年までに実に24回を数える。残念ながら古典芸能は宮廷だけで演じられ庶民とは程遠いものだった。明治12年の廢藩置縣後に大衆化し一般庶民の中に広く普及するようになった。さて、川崎沖縄芸能研究会の沿革は、先の大戦で本土の礎となった沖縄は「国破れ

緒あるものである。

昔は、相模川の河岸段丘に沿って数十ヶ所から清冽な湧水が湧き出ていたといわれるが、住宅地開発等によって現在では数ヶ所になってしまった。それら由緒ある名水を幾つか訪ね歩くことにする。座間高校前の「神井戸」、竜源寺の「竜源水」、鈴鹿の小径として遊歩道が整備された「番神水」、座間神社の御神水をめぐって、いよいよ相模川の会場へ向かう。

端午の節句を祝う行事として、相模川グランド上に目を見張る巨大な重量感のある勇壮な大凧が披露されている。大凧の歴史は古く江戸時代文政、天保年間(180年前)からと伝わり、当初は個人的に子供の誕生を祝って揚げる風習が起きたが、次第に農作物の豊作祈願のため地域ぐるみで住み暮す人たちの強い意志や希望を表す大凧を揚げるようになった。県内外から例年10万人規模といわれる大勢の見物客が訪れ、出店も数多く賑わっている。

まず、大凧を作るには、骨組となる竹の選び方、紙張り縄入れ、組み立て、題文字の書き、糸目付けなど独特な技術が必要になる。現在では「座間市大凧保存会」によってその伝統が継承され、先輩先達の指導を受けて約2ヶ月間かけて制作され神奈川のまつり50選にも指定されている。

大凧の題文字には特別の意味があり、過去には「清節」「闘魂」「龍風」等願いを込めて書かれてきた。座間市大凧保存会では

「山河あり」の言葉どおり近代兵器により島の形までも変えてしまったのである。しかし先祖から受け継がれてきた芸能「沖縄の心」までは焼き尽くせなかった。川崎でも市在住の先輩たちが、大正7年ごろから盛んに沖縄芸能保存継承に努力され、戦後

会員だより

「海老名音頭」との出会い

個人会員 岡部 眞智子

昭和6年に海老名青年団の主唱で「海老名音頭」が出来たのを知ったのは49年だった。相模原の作詩者、柿沢幹雄氏を尋ね、そのお人柄と、私の知らない昭和初期の海老名を彷彿させる美しい詩に心打られた。一番は歴史で国分寺やひさご塚を、二

番は豊作で大化の改新に出来た井桁の耕地を、三番は交通で小田急・相模・神中(現在の相鉄)線を、四番は相模川で当時の松原(現在は桜)と名物の鮎を取り上げ、それぞれが海老名の美しさに満ちている。厚木の郷土史家、故鈴木氏からは当時の新聞をいただき、作曲家の照井詠三氏のことを知った。それには「海老名音頭は会心の曲だ」と氏は語られているが、照井氏の手掛りは掴めなかった。

昭和55年、海老名市で開かれた「世界平和の人形使節展」で事務局局長照井愛子氏が偶然にも作曲家夫人だった。まさに奇跡だ。照井氏はバリトン歌手で、カーネギーホール

今年の市政施行30周年記念として、二一〇畳敷きの大凧には「座間」六〇畳敷きの大凧には「祝風」と書いた。一方の相模原市相模の大凧まつり実行委員会新戸大凧保存会では、題字を市民から募集し原字は市長が直筆して「祝風」とし、新世紀の相模原市発展を願い込めて決定した。

大凧の作り方(二〇〇畳敷きの凧)

当日配布された座間市大凧まつりパンフレットより抜粋

1 骨組み

骨組みに使う竹は、太さ約8センチから10センチの男竹と女竹で軽く弾力を増すため、切ってからしばらくたったものを使います。使われる本数は一五〇本、まるごと一本の竹や割った竹を麻縄や藁縄で結び組んでいきます。

2 紙張り縄入れ

使われる紙は、凧用の特殊な手すき和紙、新聞を開いたくらいのもので、全部で三三四枚使います。この和紙を、縦1.7メートル、横6.6メートルのものを16枚作ります。そして、16枚の紙の四隅に約1センチの太さの縄を入れ糊で張ります。

3 文字書き

体育館に16枚の紙を並べ、小さな見本を見ながら書きます。座間の大凧の特徴の一

間もない昭和23年鹿児島に在住の舞踊家、古典音楽の大家など招聘し関東で本格的な沖縄芸能の普及を始め、そして昭和24年米須清仁代を中心に焼け残りの舞台衣装や三線を持ち寄り、川崎沖縄芸能研究会を設立する。

で日本人初のデビューをし、世界的にも活躍された方と知ったが、惜しくも空襲で亡くなられたとのこと、自費で作った「海老名音頭」のレコードを差し上げ、御冥福を祈った。

近々、海老名市で市に関する歌をCDにまとめるなかに「海老名音頭」も加わえられ、本当に嬉しい限りだ。当時の市川柿之助の振付も保存して行きたいと思っっている。詩・曲、共に第一級の先生に託した当時の海老名青年団の力に、心から感銘している。その後「ささら」に出会った。



南足柄の民俗芸能

個人会員 菊地 晃 三

今回は南足柄市の郷土芸能の紹介をした
と思います。平成10年6月発行の『かな
がわの民俗芸能』—会員活動紹介号—では
足柄ささら踊り保存会、相模人形芝居・足
柄座、内山剣舞おどり保存会の三つが掲載
されています。これに足柄ばやしを加えて
四つの芸能の紹介をしたいと思ひます。

日本の郷土芸能が、民俗行事や神事や仏
事として行なわれており、すべてにおいて
信仰とのつながりを無視することはできま
せん。五穀豊穡・悪霊退散・寿命長久を祈
り感謝するものです。それは農村で生きる
人間の「生」そのものであると思ひます。

その神聖な踊り・しぐさ・芸能を演じ、
継承するのは、個人ではなく集団でした。
郷土芸能はその継承において特に、集団の
教育効果をもちます。この宗教性と教育力
が地域社会をしっかりと支えていました。

これが郷土芸能の持つ力です。
郷土芸能に新しい光が射しています。今
わたしたちに必要とされるのは、「地域を支
える精神」です。自分が生きていく地域を
支えることの大切さが、今日ほど切実に要
求されている時代はありません。

朝、家の前の道路を掃くのは、当たり前前
だった時代がありました。地域を大切にす
るにせよ加わってほしいと思ひます。
内山剣舞おどりは、古典芸能が土地の民
俗芸能として土着化していった典型的なも
のだと思ひます。当然、見て楽しむ要素の
強い芸能だと思ひます。これをどうしても
見たかったのですが、練習日がこの原稿の
締切日に間に合いませんでしたので、残念
ながら見ることはできませんでした。

その精神はボランティアという言葉で復活
しています。だから地域を支える、あるい
は支えていた文化(郷土芸能)を継承する
活動は、それそのまま立派なボランティ
ア活動なのです。老人ホームへの慰問とい
うことだけがボランティアではありません。
郷土芸能の継承をしている、しようとして
いる若者(若者でなくてもいいのですが)に
ぜひとも言いたいことがあります。

「あなたがささら踊りを踊る、そのことは(そ
のことだけで)地域を支える立派なボラン
ティア活動です。胸を張ってもらいたい
です。」
前置きが長くなりましたが、それでは「足
柄ささら踊り」です。関本の駅前にある女
性センターで練習が行なわれていました。
先輩の女性の指導のもとで稽古をなさって
いました。太鼓とささらと鉦で伴奏をする
囃子方、唄を唄う唄上げによって娘さんが
踊る芸能です。古くは盆唄とか盆踊りと言
われていたそうです。それを永田衛吉氏が
地区地区にあった多くの唄のなかから取捨
選択して、今日の四つの踊りに整理された、
という話を伺いました。昭和四十二年県民
俗無形文化財に、昭和五十年には国選択の

同様に足柄ばやしも練習日の都合がつか
ず、紹介することができません。
機会があればぜひこれらの芸能の紹介も
したいと思ひます。



西相模山北の洒水の滝祭り

洒水の滝祭り保存会会長 古瀬 考 一

神奈川県の西端、山北町平山にある洒水
の滝は、箱根外輪山の北東で西丹沢連邦の
南西の険しい小山、鳥手山(六七〇m)矢
倉岳(八七〇m)を起点に、深緑であり
人の入った事のない広葉樹林、腕(腕)・立
山・近野等の谷間から流れ出る湧水が源で、
其の水は枯れる事もなく平山の区内を潤し
滝沢川となって酒匂川に注いでいます。平
山区内から溯って徒歩十五分、切り立った
断崖の正面に轟音と共に白い水飛沫となっ
た幾筋もの水滴の束が落ち下るさまは、正
に驚嘆の一言につきる。高さ六十九m、仰
ぎ見る岩場の間、空と緑の中から落ち
て来る滝と、その水飛沫にしばし我を忘
れ身辺の不浄を洗い清められるような清々
しい気持ちになります。

洒水の滝は古くは「蛇水の滝」又は「瀧
水の滝」(新編相模風土記稿)と言われてい
たが「洒水」を広辞苑で見ると、瀧水、洒
水は水をそそぐこと、密教で清浄を念じ
て壇場にそそぐ香水、とあります。鎌倉前
期撰津の武士遠藤盛遠が出家し文覚と称し
た僧が、百日の修行を行った滝と言われて
いますが、以後信仰の場として多くの行者
が修行した名残りの石造物も散在し、今日
では環境庁林野庁から全国名瀑百選に指定
(平成二年四月)、湧水と滝沢川は、全国名
水百選に指定(昭和六十年七月環境庁)さ
れており、各地からの参観者が後を絶ちま
せん。
そのすぐ手前左側の山手に、不動堂があ
りますが、明治二十一年、滋賀県大津市の

民俗無形文化財にそれぞれ指定されました。
トントントーン、トントントーン、トン
トントーン、という三つの拍子の単調で優
美なものです。ただこの単調なリズムの繰
り返しというのは、たいしたくせものです。
ヨーロッパの多くの国の民俗芸能を見る機
会がありました。国によって多少の変化があ
ってもほとんどがフォークダンスで、男
女が掛け合いで踊っていく形式のものでし
た。そのすべては大鼓と笛のみの伴奏で、
踊り手は時には奇声を発し踊ります。太鼓
と笛はゆるやかに叩かれ吹かれます。その
単調なリズムの繰り返しが、実は徐々に人々
を高揚させ、若者を踊りの輪に誘うのです。
ヨーロッパの青年男女は祭りの日、興奮醒
めやらず終日熱狂して踊るそうで、そうな
るともう手をつけられないと言います。日
本では盆踊りがこの形です。日本の男女
もまったく同じ状態になったといひます。
それが祭りです。このささら踊りもまさし
くそういうものだと感じました。そして、
この盆踊りの踊り手が若い娘さんに限られ
ていたというのも、興味深いものです。ま
た狩川の両岸(中沼地区、生駒地区)では
互いに悪口を唄の文句に仕立てて競いあ
つたという話もききました。当時の農村の生
活が想像できるような楽しい話でした。そ
して容易に想像できるのは、この芸能が群
舞で踊られた時のエネルギーのすごさと熱
狂です。お盆にはきつと延々と踊られたこ
とだと思ひます。七月一日の夕日の滝祭り

三井寺(長等山園城寺)から常實坊の請来
が行われ、以来不動尊常實坊として住民の
信仰を集めています。文覚上人修行の伝承
以来今日でも修行する行者の姿が見られま
す。又常實坊請来を機に東京大劇場の扁額
が奉納されたり、境内で勧進相撲が行われ
た事もあり、貧民開拓のため先人達が隣
の文化人を集め、句会、謡曲大会、義太夫
大会など様々な行事を催していました。

昔から平山の滝開きとして滝祭りが盛大
に行われていましたが、関東大震災から中
止されていきました。昭和五十二年滝祭り再
興の機運が興り、今日の洒水の滝祭り保存
会を結成し、以後毎年七月第四日曜日に盛
大な滝祭りが開催されるようになりました。
名水である洒水の滝は私たちの命の根源
でありシンボルでもあります。

神奈川の景勝五十選でもある大自然の滝
を守ろうと聖地である滝壺で、地域の発展
と安全を祈念し、又参観者の安全と滝で祈
られる人々の諸願成就を願ひ、僧侶による
法要から式典は始まり、洒水の清い水を常
實坊本堂に納めるお水取り(金剛水奉納)
の儀式、滝の水が上から下へ流れるよう
に、滝の神々が降り下る道を清めます。名
瀑おろしの儀を、地域の若者の手にした帯
によって祓い清め、水は常實坊へと導かれ
本尊前へ供えられます。
常實坊の本堂は明治の建物で老朽が進み
再建の話が進み、平成二年から準備が始ま
り地元の全戸の協力による浄財を源資とし、

と、七月二十四日のささら踊り大会に披露
されるということでした。しかし、この芸
能は盆という仏事と田植えという神事に由
来していることは間違いないようなので、
ぜひともお盆に、群舞で、できれば地区地
区の寺の境内で行なわれれば、地域が生き
生きとしてくるような気がします。

次に相模人形芝居の足柄座を見せていた
だきました。約二百五十年前、阿波の人形
遣いが斑目村(南足柄市)に伝えられた相
模人形芝居は明治末から大正にかけて全盛
となり、箱根、御殿場、小田原などで公演
をしていたということです。その後衰退し、
ようやく昭和40年になって婦人会有志に
よって復活されました。保存伝承活動は順
調に行なわれ、昭和57年に県の無形民俗文
化財に指定されています。今も忙しい合
間をぬって女性の方たちが練習を続けてい
ます。この日も、世話物屋台完成を記念し
て五月二十六日に公演する、三番叟の練習
をしていました。当日には、『壺坂霊験記』
『傾城阿波の鳴門』も演じられます。また、
『三番叟』と『伊達娘恋緋鹿子』は、五月
三十一日に足柄高校特別講座として一年生
を対象にして演じられます。和気あいあい
でありながら、ひとつひとつの演技を入念
にチェックする真剣な練習でした。この三
番叟は、喜劇的演技的要素のある、たいへ
ん躍動的なものです。座員の方は高いレ
ベルを維持しながら、楽しそうにこなして
いました。これだけ高い質の芸能がさらに

吾が山北町ではこの特異な厨子、三尊仏
を調査し重要文化財に指定し保存を図る事
にしております。
引き続きいて不動尊境内を会場として地域
の皆が集い無病息災を願ひ、区内安全と人
心のやすらぎ、人々の融和と協調をスロー
ガンとした、ふれあい大会としての祭りが
始まるわけです。

先ず洒水の滝祭り保存会会長の挨拶、山
北町観光協会会長、山北町長等、関係者の祝
詞からセレモニーは始まります。続いて地
元の日本舞踊の師、泉佳澄さん振付けによ
る奉納舞踊と華麗な舞の数々。祭りには太
鼓ということ区内の有志により寄贈され
た大太鼓一、中太鼓二、小太鼓五、鈴、笛
による「文覚不動ばやし」は、大太鼓を両
面から叩きます。洒水太鼓が(リズム楽土
雨宮伊之助 作曲)地元の青少年によって
演奏され、続いて近隣の太鼓保存会社中に
よる太鼓競演、又東京品川の交流太鼓の演
奏等太鼓フェスティバルで賑わいます。
その間本堂では、祈願希望者の護摩法要

も行われ、様々な願いごとが護摩札の焚上げにより念じられております。

そして灼熱の太陽が西に傾く頃になると境内では五穀豊穡、無病息災、病魔退散、地域安穩、を神に祈る洒水の火祭りが行われ人々は火に照らされ、煙は冲天に昇り邪氣は祓われます。やがて夕闇せまる頃詩人光山樹太郎先生作詞による洒水音頭や山北音頭等、集まった人々で賑やかに踊り、プ口の歌手から素人のカラオケ等盛り沢山なふれあい大会は夜の更けるまで続きます。

何はともあれ全国名水百選の洒水の滝は、滝壺まで行かれ、中央を見上げると轟音と共に砕け落ちる白蛇のように迫り来る水の迫力は、飛沫を浴びて仰ぎ見る度に活力と精気を甦らせてくれます。

未だ訪れたことのない方々は、是非共誘い合わせお出かけ下さい。

又滝祭りには左の協賛行事が相前後日、

各所(会場)で盛大に開催されております。

- (一) 弓道大会
- (二) 吟詠大会
- (三) 俳句大会
- (四) 柔道大会
- (五) 謡曲大会

以上
平成十一年九月一日



一般寄稿

川村岸囃子保存会囃子連の活動

川村岸囃子保存会会長 沼田道雄

川村岸囃子は、八幡神社の祭り囃子として伝えられ、小学一年から高校生までの子どもたち(囃子連)に祭り囃子を教えています。平成12年8月26日山北町に誕生した(こどもコンサート二〇〇〇)の行事に参加し、江戸末期から継承されてきた祭り囃子(囃子、四方殿、神田丸、鎌倉、七丁目)

を大太鼓、小太鼓、笛、鉦の構成で囃子連が披露し大変好評を受け、地元の人たちとの親睦もできました。

今年の囃子連募集には、従来30人ぐらいだったのが50人に膨れ上がり、今年の四月の八幡神社例大祭には盛大に花山車を運行する予定です。

「八百屋お七」など数多くの物語が伝えられています。

次は「警女萬歳(こせまんざい)」、漫才のルーツといわれる二人の掛け合いが楽しい演目です。警女さんが伝える民謡には独特の文句と節があります。

トリは「貧乏神福の神」、紙芝居・鳴物入り。(写真参照)「葛の葉」のような伝承曲の他に新作語りものとして上演することがあり、子供たちにも喜ばれています。これからも少なくとも年一回は開催して皆様のご批評をいただければ幸いです。今後ともよろしくお願い申し上げます。



ニュース伝言板 協会事業報告

○平成12年度理事会及び総会の開催

平成12年7月19日(水)厚木市文化会館において、本年度理事会及び総会が開催され、11年度事業報告・決算報告が承認されました。併せて12年度事業計画案、予算案が可決されました。総会終了後、民俗芸能功労者感謝状贈呈式と、第一回民俗芸能見学会を行いました。

○平成12年度民俗芸能見学会概要報告

平成12年度の見学会は5回です。

第1回見学会

日時 平成12年7月19日(水)

場所 厚木市文化会館小ホール

概要 厚木市指定無形民俗文化財である相模里神楽垣澤社中のジュニアチームの高校生たちの元気な公演を見学しました。

第2回見学会

日時 平成12年10月22日(日)

場所 相模原市立あじさい会館ホール

第3回見学会

日時 平成12年11月3日(金・祝)

場所 川崎市立日本民家園

概要 第2・3回見学会は、「みのりの秋に

新会員紹介

権太坂横笛会

会長 菊池 四郎

この度当協会に加入させて頂きました権太坂横笛会ですが、現在会員数も家族的少人数なので、これといった活動はしていないのが実情です。今の所篠笛の練習と教室に通っています。練習は主に若間市民プラザを借りて週二日練習しています。その他には当協会より送られてきます資料をもとに県下の伝統芸能を見学しています、これがとてもいい勉強になり、紹介して頂い

て本当に感謝しています。私達も自分達の住んでいる近くに(保土ヶ谷区)古い伝統はないものかと探していますが難しいですね、これからの芸能は名所旧跡に結びつけた創作的なことも考えられますけど現状では少人数なので会員を増えよう頑張ります。今後共宜しくご指導賜りますようお願いいたします。

新会員紹介

横浜こぜ唄保存会

会長 室野 定子

初めまして。本年度から会員となった、こぜ唄師匠・竹下玲子門下一同の会です。竹下先生の師匠は、先般テレビ放映された新潟の特別養護老人ホームで今年一月に百一才を迎えられた小林ハルさん(重要無形文化財)です。二十数年前に門を叩きこんにちに至っています。

警女(こせ)唄が二十一世紀の今日まで伝承され続けてきたことを改めて考えると感謝と共に感慨深いものを覚えます。

「警女」の名の由来は、その昔貴い方前で芸能を演じる女性を「御前」と呼んで

いた(佛御前、静御前など)ことと、中国では盲目の楽器演奏者に「警」という字を使ったということにあるようです。会の名「御前会」もその流れを伝えています。今年一月二十六日、一回目の御前会を開催しましたので警女唄の特徴をプログラムに沿ってご紹介させていただきます。旅芸人警女を世話し演奏会場となる家を警女宿(今回は横浜STホール)といい挨拶代わりの「祝い唄」で幕が開きます。次は「葛の葉子別れ」、表芸でもある物語唄には他に「佐倉宗五郎」「巡礼おっる」

獅子が舞う」と題して、1人立三頭獅子舞の特集を開催しました。

第4回見学会

日時 平成12年11月25日(土)

場所 日本青年館大ホール

概要 恒例の全国民俗芸能大会を見学。出演芸能は、「サムルノリ」「牛深のハイヤ節」「水戸の大神楽」「香取の三番叟」「綾子舞」でした。

第5回見学会

日時 平成13年1月28日(日)

場所 平塚市中央公民館

概要 県内の相模人形芝居5座が一堂に会して行われる年一回の公演。今回の演目は次のとおり。

- ・下中座『生写朝顔話』宿屋より大井川まで
- ・長谷座『壺坂靈験記』内之段から飛込みまで
- ・足柄座『伊達娘恋緋鹿子』火の見櫓之段
- ・林座『伽羅先代萩』政岡忠義之段
- ・前鳥座『御所桜堀川夜討』弁慶上使之段

○民俗芸能教室

《相模人形芝居教室》

相模人形芝居の公演に先立って、会員以外の方にも解放した相模人形芝居教室を神奈川県民俗芸能保存協会の主催で開催しました。相模人形芝居の解説、人形の操作などを長谷座の協力で実施しました。

○民俗芸能関係情報の提供

団体会員及び市町村等から提供された民俗芸能関係の情報を取りまとめ3ヶ月毎に一度会員の方々に提供しています。

第1回平成12年7月5日(6月発行)

第2回平成12年10月5日(9月発行)

第3回平成13年1月5日(12月発行)

第4回平成13年4月5日(3月発行)

○共催事業

第24回相模ささら踊り大会

日時 平成12年7月27日(木)

場所 厚木市立愛甲小学校

第21回相模原市民俗芸能大会

日時 平成12年10月22日(日)

場所 相模原市立あじさい会館ホール

川崎市立日本民家園民俗芸能公演

日時 平成12年11月3日(金・祝)

場所 川崎市立日本民家園

相模人形芝居大会

日時 平成13年1月28日(日)

場所 平塚市中央公民館大ホール

会員活動紹介

【報告】

○あつきびがし座

第二十六回人形浄瑠璃自主公演

日時 平成12年6月18日(日)

場所 厚木市文化会館小ホール

概要 県立東厚木高等学校人形浄瑠璃部の卒業生が中心になって開催してきた自主公演も今年で26回。人間国宝竹本駒之助師らのご出演をいただき、『傾城阿波の鳴門』『新版歌祭文』を上演し、満員に近い、大盛況のうちに終了しました。

○第二十四回相模ささら踊り大会

日時 平成12年7月27日(木)

13時～15時半

場所 厚木市立愛甲小学校 体育館

概要 関東大震災以来途絶えていた、ささら踊りの特徴の一つである「かけ合い」が、今回厚木市の愛甲と長谷の2保存会により見事に再現されました。女性のみ約二三〇人の華やかな踊りで会場は大いに盛り上がり、観客はささら踊りの芸の奥深さを堪能しました。

○沖縄芸能大会

神奈川県指定無形民俗文化財・川崎市文化祭参加・かながわふるさとまつり参加

日時 平成12年10月29日(日)

13時～17時

場所 川崎市立教育文化会館大ホール

概要 沖縄古典音楽、古典舞踊、雑踊、器楽合奏、民謡など、会員総数三八〇名のうち二〇〇名出演。観客動員一六二一名で、盛会のうちに終了。毎年10月中旬に発表会。

☆新規会員募集

民俗芸能を実際に行っている人、また民

俗芸能に興味をお持ちの人等、協会では多くの方々の入会をお待ちしております。会員のみなさまも勧誘に御協力ください。協会では事業として、各種芸能見学会、会報・民俗芸能情報プリント発行等を予定しております。

入会御希望の方は、事務局まで御連絡ください。お問合せ先は、奥付を参照ください。なお、会費は、個人年会費年額一口一五〇〇円、団体会員三〇〇〇円となっています。

☆会費の納入について

当協会の円滑な運営のためには、会員の皆様の会費納入についての御協力が是非とも必要です。平成12年度分未納の方は至急納入くださいますようお願いいたします。

☆原稿を募集しています！

編集部では会員の方々から投稿をお待ちしています。日ごろの活動状況、行事の写真、また情報交換の場として御活用くださるなど、お気軽にお寄せください。

☆御意見・御感想をお寄せください！

編集部では読者からの御意見・御感想をお待ちしています。機関誌に限らず、協会や協会の事業のことについてもお気軽にお寄せいただければ幸いです。

あて先は、事務局まで。奥付を参照ください。

☆インターネットに情報提供

当協会では、神奈川県教育委員会の協力を得て、会員向けに3ヶ月ごとに発行している民俗芸能情報を神奈川県ホームページに掲載しています。御活用ください。

閲覧方法は、神奈川県ホームページ(総目次)から「分野・テーマ」の「文化・スポーツ」を選び、「文化」の「ふるさとの民俗芸能」を選ぶか、次のアドレスを打ち込んでください。「ブンちゃん」が現れます。
アドレス <http://www.pref.kanagawa.jp/osirase/syogaijakyusyu/topics/mingei/tobira.htm>



文化財のブンちゃん

編集後記

平成12年度の機関誌をお送りします。いろいろと御協力いただいた関係各位に感謝申し上げます。ありがとうございました。また、諸般の事情で当初予定しておりました発行時期から遅れてしまい御迷惑おかけいたしました。この場を借りてお詫び申し上げます。

本誌冒頭でもありましたとおり、平成13

年は「みんぞく芸能祭inかながわ」が1月から開催されていますが、一覧表でもごらんいただいたように4月から12月にかけていろいろな催し物が並んでいます。「かながわドームシアター」でもいろいろな企画しているようですので、楽しめる一年になりそうです。

(事務局樋口)

「かながわの民俗芸能」第65号

平成13年3月31日発行

編集 横浜市中区日本大通33

神奈川県教育庁教育部

生涯学習文化財課内

神奈川県民俗芸能保存協会

事務局 電話〇四五(二〇)一一一

内線八三五二

発行 神奈川県民俗芸能保存協会

印刷 中川印刷株式会社